





赤松文庫



四時を往る来るを身へ草木ハ
枝葉亦く風を身に受くハ
是等のかゝる身といふは
我よりいかに多くて目に見ゆる
にかれりては身のいかに
やあるものいかに多
かんとわくはるる身とい
ふは是れよりいかに多
くはるる身といふは

はつたにううなやうに
人のまゝにやうなうに
あふにやうなうに
事とにやうなうに
さうなうなうに
のまゝにやうなうに
是騎者乃うなうに
うん奇のうなうに

さうなうなうに
うなうなうに
さうなうなうに
うなうなうに
さうなうなうに
うなうなうに
さうなうなうに
うなうなうに
さうなうなうに
うなうなうに

おもれ傳授口決の事なるべから
うよせよとあるにふくむるも
ぬむゆゑ其外の世よりいふも
は志ある人よりいふも一和哥り
師近なりぬれは師よりいふ
ひよりいふも一和哥り
九事なるあせふなりかな
まゝに記して板よりならぬ

一て人よき事あり
我り秘
又ふたありてあり
ふくむる人のふくむる
とふくむるありていふ
らなるもいふも
乃道なり人なり
おなり理なり

○新撰髓腦

公任卿作

○莫傳抄

後賴述作

○和奇肘要

後成口作

○後身羽院門口傳

○和奇式

定家口作

○正風神抄

同作

○和歌庭訓

每月抄書

同作

○同口傳

家隆口作

○近來風神抄

○瑩玉集

抄政良基公

○數河上

鴨長明作

○八雲口傳

弁入道述作

○より乃所

阿仏厄作

○耕口傳

為家口作

○桂明抄

堯孝法印作

○八雲一云記

○和奇二言集

○同用表

以上

秘藏抄上

古今打聞躬恒撰之

ほ乃くあけぬく乃はまきり
鳴るれゆくぬきぬきぬき
まけきりやみりりやみりり
や戸もぬきと明きぬき
風かけぬきぬきぬきぬき
よきぬきぬきぬきぬき
さきぬきぬきぬきぬき
きぬきぬきぬきぬき
み日すぬきぬきぬきぬき

秘藏抄上

ふせのたりにあゝおまゝの飯

是の秋のふとふとやわらわら

まゐれせう人々これぞとわすれ

一 まや城系 ^二 あゝおまゝ ^三 みれえと

四 ひろ川内宛 ^五 えしちう ^六 や戸人

七 あり宛 ^八 へさ ^九 大屋

ト 次 ^十 へさ ^{十一} まゝ ^{十二} まゝ

十三 たま ^{十四} へさ ^{十五} まゝ ^{十六} まゝ

十七 ま ^{十八} へさ ^{十九} まゝ ^{二十} まゝ

十九 へさ ^{二十} まゝ ^{二十一} まゝ ^{二十二} まゝ

二十 へさ ^{二十一} まゝ ^{二十二} まゝ ^{二十三} まゝ

二十一 へさ ^{二十二} まゝ ^{二十三} まゝ ^{二十四} まゝ

二十二 へさ ^{二十三} まゝ ^{二十四} まゝ ^{二十五} まゝ

二十三 へさ ^{二十四} まゝ ^{二十五} まゝ ^{二十六} まゝ

二十四 へさ ^{二十五} まゝ ^{二十六} まゝ ^{二十七} まゝ

二十五 へさ ^{二十六} まゝ ^{二十七} まゝ ^{二十八} まゝ

二十六 へさ ^{二十七} まゝ ^{二十八} まゝ ^{二十九} まゝ

二十七 へさ ^{二十八} まゝ ^{二十九} まゝ ^{三十} まゝ

二十八 へさ ^{二十九} まゝ ^{三十} まゝ ^{三十一} まゝ

二十九 へさ ^{三十} まゝ ^{三十一} まゝ ^{三十二} まゝ

三十 へさ ^{三十一} まゝ ^{三十二} まゝ ^{三十三} まゝ

三十一 へさ ^{三十二} まゝ ^{三十三} まゝ ^{三十四} まゝ

三十二 へさ ^{三十三} まゝ ^{三十四} まゝ ^{三十五} まゝ

三十三 へさ ^{三十四} まゝ ^{三十五} まゝ ^{三十六} まゝ

三十四 へさ ^{三十五} まゝ ^{三十六} まゝ ^{三十七} まゝ

三十五 へさ ^{三十六} まゝ ^{三十七} まゝ ^{三十八} まゝ

三十六 へさ ^{三十七} まゝ ^{三十八} まゝ ^{三十九} まゝ

三十七 へさ ^{三十八} まゝ ^{三十九} まゝ ^{四十} まゝ

三十八 へさ ^{三十九} まゝ ^{四十} まゝ ^{四十一} まゝ

三十九 へさ ^{四十} まゝ ^{四十一} まゝ ^{四十二} まゝ

十二月異名

短詩 旋頭詩 詠諧行

まうをのいしりす

秋の雪にまををばじれふすれ

まををれいしををにるもく 貫之

わはつふまををいしををれいし

あふれ野りしををわくあし

是未尾花をぬきをのいしも也尾花のわが付そ

ますすまををいしををいしををいしを

ゆきをのいしを人あり

花のうきあしををいしを

まををいしををいしを

はるのいしを車をを也まををいしを

まををいしををいしを

我やのまををいしををいしを

まををいしををいしを

まををいしををいしを

まををいしををいしを

まををいしををいしを

まををいしををいしを

此を云ふに李れ也由りりと云ふは
うらやま

五
もたひてうらやまを云ふは

えしあふれを云ふは

えしあふれを云ふは築地を云ふは
可く云ふは也

六
山人乃ち思ふを云ふは

知ふれゆふれを云ふは業平

山人と仙人也山人は山人と云ふは
おし仙家より電の如き

ゆえ電なり——やうな電に
んがうんを云ふは

山人は山人と云ふは山人と云ふは
うたふれを云ふは山人と云ふは

あつてやうな電を云ふは

えうな電を云ふは

くう電也云ふは山人と云ふは
あつてやうな電を云ふは

九 人とりぬるや戸つけぬあやうにを

螢もとりや火いこも一音の銅忠

あれはふたの堂へやたやま

十 ともやとりぬおしひれもさへ

ころり一稲束をたぬもやも 僧侶鑑昭

そとや守と田乃の海も人もひこ云物

海をもとあれもむけをもくみあは田より

猪の走ともむとく

十一 ともは小野のさみぬうのさへ

これちりちりまともぬと雷

十二 ともはぬともは煙とも也

ともはちとむねのふりたを

ともはちとむねのふりたを

白玉ねとい霞とも

十三 ともはちとむねのふりたを

ともはちとむねのふりたを

こころれ通とい木こふるくはぬき所こころ

薪をいふ

十四

ともはちとむねのふりたを

ともはちとむねのふりたを

つらつら海原也さめと浪とまわり
しほはこほむといふなりて

まじりていふはまゝのいひにまじ

こまわりてねて旅人やちの田院

ふむふむといひのちたてふむむと

まじりていふはまゝのいひにまじ

いふなり

まじりてねて浪のたてふむ

つれなきふかきつらぬる酒井金

まじりていふはまゝのいひにまじ

まじりていふはまゝのいひにまじ

おれをぬきかゝるぬあふはる

おろりておろりて人なませ 元方

おの緒といふ今くあふりつひといふ

まじりていふはまゝのいひにまじ

まじりていふはまゝのいひにまじ

いふはまゝのいひにまじりていふ

まじりていふはまゝのいひにまじ

まじりていふはまゝのいひにまじ

秋の田れはまゝのいひにまじり

朝数

けふれまをきくまめれき
そわろといひかつ戸へけふれまゝの時入ほ
なり

十九 はやあけのうれひ雲ひきけ

あそひふさの初音ひきけ 小野篁

つわものやうなまれ胡くまゝのたをさとい
郭公

廿 けふあけのうれひ雲ひきけ

越路乃かゝる海さうりかね 惟明

あそひのうれひまれ朝のきく

廿 けふあけのうれひ雲ひきけ

龍田れやまのうれひきけ 上野峯雄

ふれまゝのうれひきけ

うれひ

廿 けふあけのうれひ雲ひきけ

庭もあけのうれひきけ 貫之

けふあけのうれひ雲ひきけ

廿 けふあけのうれひ雲ひきけ

あまれうの橋よ天けよ七文れき 珍橋

おしあつたれいさよ橋と云く

山乃一所おきりておのより

それかきくあふ出筆の所家持

おきりてい畠をうく相おとい黄葉とて草

れるく出筆去れ初生く

おしあつたれいさよ橋と云く

遠玉はふせかぬねぬ 讀み知

せりきといふたてくせれといまおき遠玉は

ことけりぬき道く

おしあつたれいさよ橋と云く

さむくさおねを云とおきく

おしあつたれいさよ橋と云く

おしあつたれいさよ橋と云く

あけさいせくやあーさうー

おしあつたれいさよ橋と云く

おしあつたれいさよ橋と云く

おしあつたれいさよ橋と云く

おしあつたれいさよ橋と云く

おしあつたれいさよ橋と云く

おしあつたれいさよ橋と云く

天つとちつむ神のみうぢね
 ゆけうとつむ神はれおぢま
 みそとつ夜くゆいさの夜さきとる
 ちりちりちりちり神の衣をさき
 ちりちりちりちりちりちりちりちり
 ゆけうとつむ神はれおぢま
 たつとちつむ神はれおぢま
 とちとちとちとちとちとちとちとち

ちりちりちりちりちりちりちりちり
 おろろろろろろろろろろろろろろ

新編神代卷上

うねうねうねうねうねうねうねうね
 いふにきしうねうねうねうねうね

うねうねうねうねうねうねうねうね
 うねうねうねうねうねうねうねうね

うねうねうねうねうねうねうねうね
 うねうねうねうねうねうねうねうね

うねうねうねうねうねうねうねうね
 うねうねうねうねうねうねうねうね
 うねうねうねうねうねうねうねうね
 うねうねうねうねうねうねうねうね

うねうねうねうねうねうねうねうね
 うねうねうねうねうねうねうねうね

秋さのうつろふまじりて 卯敷

去と秋とさうりたるまじりて 卯敷
けりうらみ染つるまじりて

染ふぬもあまきつひもあまきつひ
あゝ染ふれぬまじりて

これさうりたるまじりて 卯敷
俄くは海乃風なり

ますかたも向ふまじりて 卯敷
いづみきれいの海乃風なり

あゝみきれの海乃風なり 卯敷

我ふちた鏡なうてまじりて 卯敷

身よつとまじりて 卯敷
あゝぬまの鏡なり

あゝぬまの鏡なり 卯敷
やれまじりて 卯敷

あゝぬまの鏡なり 卯敷
あゝぬまの鏡なり 卯敷

あゝぬまの鏡なり 卯敷
あゝぬまの鏡なり 卯敷

あゝぬまの鏡なり 卯敷

不鳥ふまに雄多をきくれるるる
ふりくも鳴るともくも

州八
あゝちおろこやのふねよの川
ちよふねまにちよふねまに

ちりやまにちりやまをきく

ふの身に霜をく夢やうつる
うねわくまなまらけ

高橋かゝるを志す所

あちおハ辨と分男く是れは世で上
可を好むにありきよにきり深々夜の明
かりけしんばそちのきくこれさうなれや
ふく麻ありきとうの中になつてゐる

ふしや今夜これぞ夢成るなりと
夢より世にあらざるをわづらひて
も世のふしやうきなるをわづらひて
あはれむやいふにたまふありとも
ゆふとちか皮なるとまほのまれぬ
おもひこころく麻衣きて行くらば
不思議なること黒き髪も明きは
将人を見よお乃鹿射なりと皮を
うちてとちかこのめりてけさ
夢野鹿やうきなりといふ日本記

みづり

卅九

うのみゆきつふそふろり菊れ
去きさされあつてうさ 談人
りうきくは美ゆき美くられぬ若菜如
門門黄ゆき河あぐ竹ふふより
美和菊と云美初め美と云く去きこ枝
そ枝と云く水と云くたさる

四十

身うこふあふ枝よりぬき
ゆきまかほよくひもろり 談人
ねきふと神より新より孫宜よけちやう

五十一

いそふと神いうろりあふ
あふれは原ふをわ月うを酒井
天は乃ほよりいそふと云可るれ
うさふと云く神をさ

朗詠部

一 清紅鮮好仙か之電慍毛

さうぬぬ衣よりか電れふも
と川あつ物を梅乃あふいり
紅より白梅れふ衣を看ともさふ人
みさぬかりと云うう仙人の葉よりす

電ハ多クありや云く乃重もけ梅より
つるをまけりとよき所也仙人のまじりて
きくらぬはれろふなりきくらぬはれろふ
^{ニエン}^{シヤウ}燕昭王招涼之珠當月自^ト得^{トモツクカラエリ}
なりけりさうなるといふ月々
さうしに玉れりやかとうみゆ

八重れははなはなをさるる

四月 卯月

源宗千

卯月とてやうれ花はなはなをさるる
うらうらきやうやうほくま

五月 戌月

元吉

郭公五月の雨うらうれをれて
とねくもりかよ枝うはらぬ

六月 亥月

小野春風

これ月れは花はなをさるる
そとやうあさう風うらうさ

七月 子月

貞文

それされは花はなをさるる
まきうあふきうきちつ

八月 丑月

保登父

初とれは花はなをさるる
卯のうれは花はなをさるる

九月 寅月

貞文

わやうあふ花はなをさるる
かうふうは花はなをさるる

十月 卯月

意性

秋月一れて後の末もあつた
うぐいすの葉に錦成る

十月 霜月

冬はまた雪のあつたやうなり
うぐいすの葉に錦成る

十一月 志す

業平

冬にやうく志すに錦成る
うぐいすの葉に錦成る

又松花名あり

正月 さみより月

貴之

やうくさみより月あり
うぐいすの葉に錦成る

二月 じめけ月

友則

うぐいすの葉に錦成る
うぐいすの葉に錦成る

三月 さみより月

同

うぐいすの葉に錦成る
うぐいすの葉に錦成る

四月 さみより月

家持

うぐいすの葉に錦成る
うぐいすの葉に錦成る

六月より月きあらぬ月

五月より月

小野篁

池つかばまきもゆりたれあやかりし
やたにのりけり月こそ

樂膳六月より月

木近院太子

ほとふけなごりてうきわり
いともれ月よりあらぬ月

七月より月

酒井人真

それよりゆきあひ月まちく
いにふれり月

八月より月

藤原法師

きりくきりかき月より
あきりくきりかき月

九月より月

菅原忠高

これよりゆきあひ月より
きりくきりかき月

十月より月

同

よき山にゆきあひ月より
ゆきあひ月より

十一月より月

人丸

松竹

にむすこを月うき海なるに

おの宮けふありけりき

十二月年よりひ月

あれううやうひ月うきね

かきうきふれまよりきね

是れあかうちに入るに十二月れ其を
そこの宮名をもちてうきの異名を反作あり
此異名をもちてうきふれにそのうきを
末の世人もこれ可ぬいひしうき

八短評之す

あふおやま

我より幸り

うれれ乃

逢ふなり

うれれ

あふおやま

格くうきの

思ひみなり

かきうき

あふおやま

あふおやま

うれれ

あふおやま

うれれ

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

あふおやま

和歌集

こころをれて	ふけいふけを	きれりかき
あひがきとむ	ふふあきとむ	人あきあき
さみうたふ	たうたれも	ふとわわく
船かくた	あけいりり	せしきあき
庭りゆく	さむやきへい	あきふ人き
いけもの神ふ	きつたれ	きかきあき
おき人きも	あきあきあき	あきうた
よふあき人	あきむとあき	貫之

九 旋頭詩

まうさみきれ山乃もあきあき

又神正月時あきうもあきあき
謝借奇れき

+
いもあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

和歌集

松前

十八

こころを	ふけふを	きりり
あひが	ふふ	人あ
をみ	夕	ふ
船	おけ	せ
庭	さ	あ
し	な	う
お	あ	ま
よ	あ	ま

九 旋頭詩

まうさみきれ山乃もから栄を

又神主月時ぬりもせり
誂借奇れ

+
くもれ田つれりほま
あくれさとあれく



Handwritten notes and signatures in the bottom left corner.

